
その二人、危険につき

autumn

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その二人、危険につき

【Nコード】

N1518V

【作者名】

autumn

【あらすじ】

大学生の如月秋人が久々に実家に帰郷すると、そこで待っていたのはなんと猫又の小春だった。「おぬしは、世界に踏み込む意思があるかえ？」小春の依頼とその対価。世界の裏側と自身の秘密。非日常に足を踏み入れるとき、なぜか秋人と小春の同棲生活が始まる。

1 邂逅

『人生とはな、自分で考えてる以上に突然で理不尽なもんじゃぞ』
色々な意味で尊敬する今は亡き祖父の言葉の一つを、如月秋人^{きさらぎあきひと}は反芻していた。

なるほど、確かに世の中には計り知れないことも多い。

だからこそ常に心の準備をしておくのは大切なことだ。そのとおりだと思う。

が、しかし。実家の玄関に佇むこの存在を見て考える。

「どうしたのじゃ？ 入ってこないのかや？」

……猫に話しかけられる事態を想定したことは、果たしてあっただろうか。

秋人は混乱する頭で、ことの経緯を思い返した。

大学生の夏休み、大した予定もなくどうしたものかと考えていた秋人に叔父から久々に電話があつたのは、つい先日のことだ。

内容は、旅行で夫婦とも長期不在にするため実家の留守番をしてほしいという依頼だった。

仕事は別の者が引き受けるとの話であり、バイト代も出ると聞いた秋人は喜んで引き受けることにした。

翌日、一人暮らしをしている都市部の駅から、ローカル線乗り継いで地元へ向かった。

最寄の駅を降り、少し寂れた町並みを抜け、パンタグラフのない線路沿いを歩き、坂道をのぼる。

久しぶりの故郷を記憶と見比べながら帰った結果、実家に着いたのは夕方前くらいになっていた。

玄関のチャイムを押して、挨拶を考えながら叔父夫婦の出迎えを待つ。

電話では、叔父達の旅行の出発は明日になると聞いていた。

「うむ、よく来た。入ってよいぞ」

しばらくすると、鍵が開けられる音とともにドアの向こうから声がかけられる。

聞き覚えのない声だった。はて、叔父の家族にこんな口調の人なんていたのだろうか。

「お邪魔します」

疑問を浮かべつつも仕事関係の人かもしれないと思い直し、秋人は挨拶をしながら玄関の戸を開けて、正面を見た。

そして 秋人は言葉を失った。

「ふむ……これはあの性悪夫婦に一杯食わされたか」

正面からの声で、秋人は我にかえった。

落ち着け。状況を把握して冷静に対処だ。活路はある、たぶん。とりあえず正面の猫っぽいものは無視することにする。

「失礼します！ 今日伺う予定だった秋人です！」

「なるほど、これが」するー」というやつか……。ちなみに残念だが家には他に誰もおらんぞ？」

さりげなく冷静に挨拶してみたが、ツツコミだけで奥から返事はなかった。

実はただの聞き間違いだったという可能性は、すぐさま潰される。だが、まだ奥の手はある。

秋人は、がばつと勢いよく額に手の平を当てた。

「顔色はすこぶる良いぞ。風邪の心配はないじやろう」
体調はわりと完璧であった。

実は高熱による幻聴という可能性も、即座に潰される。

秋人は、正面に座ってる猫を恐る恐る見なおした。

……やむをえまい、認めよう。どうやらこの猫は喋るらしい。

必死に無駄な逃避をしていた秋人を尻目に、猫はかぶりを振って

話しかけた。

「やれやれ、こうなっちゃってしまっただ致し方があるまい……まあ少し落ち着け」

猫が静かに語り掛ける。

「この状況に混乱しているのはわかる。聞きたいこともあるじゃろう。じゃが、立ち話もなんではないかの」

言われてみれば、確かに玄関の戸を開けてから秋人はずっと立ち尽くしていた。

「続きは居間で話すでしょうか。お茶とお菓子もあるぞ。ただし“せるふ”、じゃがな」

綺麗な白毛に覆われた体軀を翻し、猫は奥の居間へと歩いていくが、すっと立ち止まり、振り返ってまたこちらを見る。

「……ああ、もし帰るんじゃないやったら止めはせん。白昼夢と思って忘れるのも良かるう。……わしとしては少々寂しいがの」

言い忘れたらしい言葉を伝えと、今度こそ猫は居間へと向かっていった。

秋人は、気がつかないうちに強張っていた肩の力を抜く。

どうやら何かとんでもないものに巻き込まれたらしい。

しかし、ここで帰るのもなんだかすつきりしなかった。

白猫の最後の言葉が、嫌に耳に残っていた。

思い悩むうちに、秋人は色々な意味で敬愛する今は亡き家族の言葉思い出した。

『秋人よ、迷ったら進んでみる。悩むより得るものは多いぞ。ただし危なくない程度にな』

『あつくん。世の中なんて、意外となるようになるものなのよー』
……あなた方は本当に大物で、似たもの夫婦でしたね。

二人の教えを胸に、秋人はため息をついて家の奥へと向かった。

久しぶりに入った家は思ったとおり少し古びれていて、そして懐

かかった。

考えてみれば、実家をに帰るのは実に五年ぶりになる。

高校入学のために引っ越して、入れ違いに叔父夫婦が入居することになってから、一度も戻っていなかった。

学生生活が色々とあって忙しかったのもある。

ただ、あまり戻りたくなかったというのも本音だった。

幼少時をほぼ祖父母と過ごした身に、二人のいない家は寂しすぎたのだ。

ふと、足を止めてまわりを見渡す。

柱の傷、壁の汚れ、天井の模様。

背が伸びたこと、落書きしたこと、お化けが怖かったこと。

目に入る、輝ける昔のかけら。

……いや、やめよう。まずは今どうするかを考えなくては。

頭を振って秋人は感傷を振り払い、思考を切り替えた。

少し考えた結果、気分を落ち着かせるために言われたとおりお茶を用意することにした。

記憶を頼りに台所に向かい戸棚を調べると、確かに市販の茶葉が収納されている。

そして隣には煮干の袋。

……さて、どうしたものか。

秋人は、自分のお茶を淹れつつ、煮干も小皿にいれて持っていくことにした。

準備を終えて居間に向かうと、猫は座布団にちょこんと座っていた。

少し小広く造られた空間は、縁側からの日差しが差し込んでいて明るい。

「ふむ、来てくれたんじやの」

卓を挟んで向かいに座り、運んできた小皿を差し出す。

「このままではすっきりしませんのでね……よかったら、どうぞ」

「おお、気が利くのう」

猫は煮干を器用に口にくわえると、おいしそうに咀嚼し始めた。秋人も、持ってきたお茶を啜る。少し苦い。

しばし平和な時が流れる。黄昏までの幕間。あるいは嵐の前の静けさ。

沈黙を破ったのは猫であった。

「さて。一息入れたところで、まずは簡単な自己紹介でもするかの佇まいを直して、猫が言葉を続ける。

「わしの名は小春こはるという。あー、有体に言えばいわゆる猫又じゃ。ほらよく言われるじゃろう、長く家に居ついた猫が化けるというあれじゃよ。まあ実際はちよつと違うんじやが。ちなみに雌じゃぞ」

「猫……又……」

妖怪ときたか。なるほど、それならば言葉を発してもおかしくはないかもしれない。

まあ会話が成立しているのだから、急に取って食われるようなことにはならないだろう。

秋人は事態を把握するため、できるだけこの状況を受け入れることにした。

改めて小春を観察してみる。

体長は40cmほどで、比較的小柄な印象を受けた。

長い尻尾が特徴的だった。どうも二股には分かれていないようだ。きつと猫としては美人さんなのだろう……たぶん。

総合的な判断としては、やはりただの猫にしか見えなかった。言葉話を話す以外は。

「その、そんなに熱く見つめられると照れるんじやが」

「ああ、ごめんなさい。そんなつもりじゃ」

「冗談じゃ」

どうも、なかなかに愉快的な性格らしい。

「それで、小春さんはどうしてこの家に？」

「小春でかまわんど。話し方も畏まらなくて良い。実はな、おぬしをここに呼んだのは他でもないわしなのじゃ」

「じゃあ小春。叔父さん達は小春のことは知って？」

「そうじゃ。わしはてつきりおぬしに話を通してるものだと思っておったのじゃが……」

「……どうやら説明をすっぱかされたらしい。恐らく面倒だったのだろう。」

そういえば、叔父夫婦は物臭すぎると親父が愚痴っていたのを聞いたことがあった。

まあ確かに、何も知らないものに対して猫又を紹介するのは難儀だとは思うが……。

「とすると、僕をここに呼んだ理由は？」

「うむ……。率直に言くと、助太刀を頼みたいのじゃ」

「……具体的な内容は？」

小春は、真剣な目で訴えた。

「広義でいえば、鬼退治じゃ」

「その、また随分とメルヘンチックな……」

桃太郎にでもなれとでも言われるのだろうか。

「まあ待て、あくまで抽象的な表現じゃからの。最後まで聞いてほしい」

「……わかった。ごめん」

困惑していたのが顔に出ていたらしい。

「実はな秋人、おぬしに手助けしてもらうためには、仔細を話す前に説明しなければならぬことがあるのじゃ」

「どうやら複雑な事情があるようである。」

秋人は小春の次の言葉を待った。

「ただし、これを聞くと恐らく後戻りができん。そしてその理由も説明が難しい」

更には今後の日常生活に支障が出る可能性があるようだ。

ああ、つまりこれは。

「じゃが、今ならまだ引き返せる。本来はわしと会ったこともいかなのかもしれないが、まあ夢だとも思えば何とかなるじゃろ」

最後の猶予というやつなのだろう。

今ならまだ無かったことにして戻れますよ、ということらしい。

「当初はその覚悟をもって持ってここに来たのじゃと思っておったが、先ほどの様子を見るに恐らく何も聞いておらんようじゃしの」
そのとおりだった。

小春を見て思考が固まるくらいには、何も知らなかったのだから。
「わしとしてはここに残ってほしいのが本心じゃ。じゃが、決断はおぬしがしなければなるまい」

小春が、穏やかな目でこちらを見る。

「故に今一度ここで訊ねよう。 おぬしは、世界に踏み込む意思があるかえ？」

2 困惑

ふいに蘇る昔の記憶。

物心つく頃から、秋人のほとんどの時間は祖父母とともにあった。研究職についた両親はほとんど家に帰ることがなく、必然的に祖父母に面倒を見られていたからだ。

生活の中で二人に教えられたことは、思えばあまり一般的ではなかった。

それは例えば武術であつたり、学問であつたり、家事一般であつたり。

あるいは変な人生観であつたり、妙な処世術であつたり、尻の敷き方敷かれ方であつたり。

正直どうかと思うものもあつたが、しかし今となつてはどれ一つ無駄になつていないものはない。

今の秋人の礎は、あの”変わった二人”のおかげであることは、疑いようもなかった。

更に溢れる記憶の海が、奔流となつて一つの場面を描く。

浮かぶ光景は、祖父母二人に改まつて呼び出されたときのこと。

大事な話　確か二人はそう言っていたような気がするが、あまり鮮明には思い出せない。

『　　いいか、秋人。いつかこの先、お前に特別な助けを求めてく
……が現れ……』

『もしかしたら……かもしれないし、かわいい……かもしれない……
ねー』

『こりや、話の腰を折るな。……わしは、お前を強引に……へ縛り
たくはない。普通の生活こそ幸せなはずじゃ。　　じゃが、もしも

世界の巡り合わせでお前にその役割が回ってきたのなら』

『大丈夫。きつとあつくんには才能が眠ってるわ。だって、私たちの孫だもの』

『おまえが選んでくれるなら、できれば、あの子を助けてやって欲しい』

『もしかしたら、すごく長いお付き合いになるかもしれないわよー、うふふ』

『……おまえは本当にその類の話が好きじゃな。あの子は……じゃぞ、そこまで……』

『あらいいじゃな………に……は関係……考えが古……』

『ええい、話は終わりじゃ。さてすまんが、この記憶は本当にその時が来る……眠……』

『あらあら、あつくん。長くなってごめ……さい……ちょっとこちを向……あとでお菓子……』

祖母の顔を見たところで、初めて見る記憶のフラッシュバックは幕を下ろした。

「

」

小春の視線を受けて、秋人は思考を今に戻した。

少しの間、思いふけてたようだ。

「質問なんだけど」

思い切って小春に問いかけた。

「僕の祖父　善次郎のことは知ってる？」

「うむ。善次郎には大変に世話になった。それこそ言葉では語りつくせないくらいにのう」

「そっか……」

さっきのは、もしかしたら　いやたぶんきつと、そういうことなんだろう。

「よくわからないけど、それは小春のためになるんだね」

「無論じゃ。ひいては世界のためになるともいえるじゃろう」
「なかなかどうして、スケールは大きいらしい。」

「　分かった。引き受けるよ」

小春の目が、僅かに揺れる。

「本当によいか？ わしとしては助かるが、先程も言ったとおり後戻りは……」

「構わないよ。それに、どうやらいつのまにか既に頼まれてたことみたいだし」

「……承知した。すまんが、どうかよろしく頼む」

小春が頭を下げる。

「気にしないで。きっとそれは、本来最初からうちの仕事なんだろうから」

「……知っておったのか」

「いや、なんとなくそう思えたただだよ」

記憶のことは黙っておくことにした。

「あーそれでの、実はその、もう一つ、頼まれてほしいことがあるんじゃないか」

「ん？」

小春を見ると、なんだか目が泳いでおり、動転しているようだった。

はて、何かほかにも問題でもあったのだろうか。

「いやなに、仕事を依頼する以上、報酬が、その必要じゃろうと思うのじゃが」

「なんだ、そんなことを気にしてたのか。大丈夫、他に当てがあるから」

有償は難しいということだろう。

そもそもこれが何かしらの如月家の仕事であるのなら、それを小春に請求するのはたぶんお門違いなのだ。

ただ単に、叔父にあとでゆっくり話をすればいいだけであるもちろん増額請求を含めて。

「まあそういうわけにも、いかぬじゃろう」

なんだろう、さっきから小春の歯切れが悪い。

「そこでその、質問があるのじゃが」

小春が何か思いつめているようこちらを見て言った。

「あ、秋人、おぬしに契りを交わした相手はおるかえ？」

「……は？」

一瞬、小春が何を言っているのか分からなかった。

意味を理解したあと、今度は困惑した。

「いや、いないけど……」

「そ、そうか。なら問題は……」

口籠る小春。

秋人にも女友達はいたが、深い関係になったことは一度もなかった。

色々と事情はあるが、要はなかなか価値観が合わなかったのである、たぶん。

それにしても、なぜ今そんなことを聞くのか。

どうしたものか困惑していると、再び小春がこちらを見る。

「では、ほ、報酬に……報酬に……」

言いかけて、しかしまたすぐに下を向く。

「……くっ……存外に恥ず……話が違……」

なにやら呟いていたが、ほとんど聞こえない。

すると、急に小春が何かを決心したような瞳でこちらを見つめてきた。

その口が言葉を発する。

「秋人よ！ 報酬として、わしを伴侶にしてよいぞ！」

「……は？」

本日二度目の硬直だった。

またもや思考が追いつくまでに時間がかかった。

伴侶？ 今伴侶って言わなかったか？

いやいや、まさかまさか。話が飛びすぎている。

「ちよっと待って。どうということ？」

「い、言ったとおりじゃ。仕事の報酬として、わしがおぬしの伴侶になってやるのじゃ」

聞き間違いではなかったらしい。なんだか頭が痛くなってきた。

「……ちよつと落ち着こうか。むしろ僕も落ち着こう。言ってる意味は分かってる？」

「つがいになり、食事を作ったり、洗濯をしたり、添い寝したり……すればいいのじゃろ？」

いや確かに間違っではないが。なんだろう、どうにも所帯じみてるような気がする。

まさかとは思うが。

「もう一回訊くけど、本当に意味分かってる？」
再度問い詰める。

すると、ぼそつと小春が白状した。

「そう言えと、君子に教わったのじゃ……」

やはり元凶はあなたか迷惑祖母！？
ばっちゃん

亡くなってなおトラップをしかけてくるとは……恐ろしい。

将来にまで気にかけてくれるのはありがたいが、もう少し別のことを考えてほしかった。

しかし弱った。

大変申し訳ないが、猫と婚約する度量はまだ持ち合わせていないのだ。

ここはきつちりとお断りしなくてはならない。

「気持ちはいがたいけれど、流石に猫と付き合つのは」

「にゃあああああ、しまった！　そういえば、必ず変化してから会えと言われてたのを忘れておった！」

突然小春はそう叫ぶと、慌てて立ち上がり卓から少し離れた。

「秋人！　しばし待つのじゃ！　そして今まで記憶をちよつと保留にするのじゃ」

「いや、そんな無茶苦茶な……」

何かミスがあったらしい。

小春が目を閉じて、瞑想し始める。

「存在干渉。対象は自身。置換対象は記憶事象を参照。事後修正として感覚一致を優先。コネク接続！」

突如、目の前の空間が歪んだ気がした。

あるいは、それは世界の一部だったのかもしれない。

いずれ今までに経験のない感覚なので、上手く表現できない。

体は揺れていないのに、頭の中でぐらぐらしている感覚が渦を巻く。耐えられず、思わず目を閉じた。

恐らく、小春が何かを行ったのだろう。

あまり深く考えていなかったが、彼女は猫又なのだ。何が起きてもおかしくはない。

少しすると、ようやく意識がはつきりしてきた。

目を開ける。

「よし、成功じゃの」

今日は、何度硬直すればいいのだろうか。

目の前に見知らぬ少女が立っていた。

突然のことに頭が働かず、ただ少女を凝視してしまう。

肩下まで流れ落ちている艶やかな銀髪、あどけない瞳、薄紅色の唇、幼くも整った顔立ち。

身長は140cmくらいだろうか、10代前半くらいの印象を受ける。いわゆる小と中の境目程度。

主観だが、遠目でもはつと目を引くくらいの可愛らしさがあった。

少し付け加えるならば、控えめに言っても、起伏のあまり見られない体つきだった。

更に付け加えるならば、なぜか何も服を着ていなかった。

「小春……なのか……？」

「そうじゃ。これなら釣り合いが取れるじゃろう？」

手を腰に当て、小春が澄まし顔で言う。

色々と見え過ぎだった。

ようやく思考力が戻ってきた秋人は、急いで後ろを向いた。少し顔が熱い。

まさか人に変化できるなんて……これが妖術というやつなのだろうか。

「とりあえず、まず服を着てくれと助かるかな……」

「ん？　　にやあああああ！！！」

絶叫する小春。

どうも、さっきの格好は意図したものではなかったらしい。

「み、み、見たかえ？」

嘘は付けないが、正直に言うのは憚られる。

結局のところ黙することになってしまったが、世には便利で残酷な言葉があった　沈黙は肯定であると。

「うう……なんたる失態……」

小春はとりあえず近くにあったバスタオルか何かを羽織っているようだった、音から察するにだが。

「不可抗力とはいえ、その、ごめん」

故意ではなかったが、とりあえず謝ることにした。

猫又だって、きつと女の子なのだ。

「こつちこそすまんのじゃ。この程度で取り乱してしまつて背後から聞こえてきた声は、少し元気がないように思えた。」

「……そうじゃよの。伴侶となる以上、全てをさらけ出す覚悟くらいは必要なのじゃ」

だが次に聞こえてきた口調は、なにやら決意を固めたものだった。なにやら雲行きが怪しい。

「あのー、小春……？」

恐る恐る背後に声をかける。

ばさつという、なにやらタオルの落ちる音が聞こえた。

「さあ秋人よ。貧相で申し訳ないが、ぞ、存分に堪能するがよい！」

問い。このヒートアップしている小春を、どうすればやりすごせるか。

答え。まずは友達から始めようと伝えて宿め、服を着るよう

うん、これしかないだろう。紳士たるもの、流されてはいけない。そう思いプランを実行しようとする。

しかし、このあと秋人は思い知るのだった。

この世はいつだって理不尽なのだ。

「小春さん。すみません遅くなりましたですー」

突然、居間の戸が開いた。

顔を向ける。見知らぬ少女が立っていた。目が合った。

来客のようだ。小春の知り合いらしい。

全く気がつかなかった。小春とのやり取りに氣をとられ過ぎた。まずい。

この状況はまずい。

面識のない男と、あられもない姿の少女。どう考えてもまずい要素しかない。

。落ち着け。状況を把握して冷静に

「なにしてるんですか――――！！！」

すぐさま怒声が響き渡った。

3 誤解

「ごめん、これには事情が」

秋人は説明を試みるが、途中で咄嗟に体を後ろへ反らした。

強烈な勢いで、体すれすれを脚が薙ぐ。

少女からの、切れのいい回し蹴りだった。

どうにも臨戦体勢である。簡単に説得は出来そうにない。

「避けるなです！ 変態さんめ！」

案の定、きつちり誤解されていた。

じりじりと間合いを詰めてくる少女。

背格好から年齢は小春より少し年上くらいにしか見えないが、動きは手練であった。

そして、なぜか巫女装束である。

あれでよく体捌きが出来るものだと感心する。

……さて、ところでどう切り抜けたものか。

事態打開の手段を考えるが、残念ながら少女は時間を与えてはくれなかった。

「やつ！」

踏み込みから縦拳が放たれる。

拳動は素直だが、少ない動作で行われるそれは、素早く鋭い。

右腕で弾きつつ防御するが、衝撃が腕に響く。

続く左下段蹴り。

威力を相殺させるため、こちらの足を防ぐように当てて弾き、反動で間合いを取る。

「……やりますですね」

攻撃を防がれた少女が、キッとこちらを睨む。

「ちよつと本気を出しますです」

対面に立つ少女が、大きく息を吐く。
瞬間。

先程よりも更に鋭く踏み込みをかけてきた。

迫る攻撃は、左から右への手刀による払い打ち。

防御するか否か。

いや、これは。

秋人は、最終的に回避を選択した。

ただし出来るだけ体勢を崩さないように、最低限の動きで。

重心を下げ、計算した距離だけ後退する。

狙い通りにぎりぎりを掠めるだけで当たらない手刀。

そして、”本命”の左掌を構えていた右手でタイミングよく捌いた。

「ひゃっ」

勢いを流されて、少女が体勢を崩す。

防御が大きく回避をしていれば、詰められて左の強烈な一撃が見舞われていただろう。

初段の踏み込みが、思ったよりに浅いことに気がつかなければ危なかった。

さて、崩してしまえばこちらの手番である。

素早く弾いた少女の左腕を左手で引き寄せて、足を払いつつ右手で更に後ろに流すように畳に押し倒す。

そのまま左手を捻り上げつつ、背中から押さえ込んで組み敷く。

これにて捕縛完了。

捕縛？

「……ああ。またやってしまった」

うな垂れる。

どうにか落ち着かせられないか考えていたにもかかわらず、結局この有様である。

祖父に叩き込まれた体術は、攻勢的行動に対し体が勝手に一連の動きをする程度には染みこんでいた。

押さえこまれている少女が、下から涙ぐんだ声を上げる。

「わ、私も毒牙にかけるつもりですか。でもたぶんきっと全然面白

くないですよ。胸もぺったんこですし。……あーでも小春さんがいいなら自分も圈内ですか……いやですーやめるですよー！」
うな垂れている場合ではなかった。

このままでは完全に悪者である。

「ごめん！　すぐに離すよ！」

秋人はすぐさま少女を解放して、その場で謝った。

「ふえっ？」

なんだかよくわからないというような声をだす少女。

「えっと、変態さんじゃ、ないですか？」

顔を上げてきつぱりと言う。

「断じて違います」

「そうじゃぞ沙希。そやつは押し入りではない」

小春も言葉を揃えてフオーする。

どうやらやつとのことで事情を察したらしい少女が、顔を赤くして謝りはじめた。

「本当にごめんなさいです！　私また早とちりしてしまっ……」

しかし言いかけてた途中で、あれつと首を傾げる。

「でもじゃあ、なんで小春さんはあんな格好だったのですか？」

小春を伺うと、なにやら決まりの悪そうな顔をしていた。

「うむ……実は、ちよつと付属形成に失敗しての」

「うう、小春さん……しつかりしてくださいですよ……」

よく見ると、小春はいつの間にか服を身につけていた。

着ているのは淡い桜色を基調とした和服だった。

表面の薄い花弁柄の刺繍が可憐さを添え、その姿は無垢な幼さと共に幻想性を備えていた。

視線に気がついた小春が、こちらを向いて答える。

「この服か？　おぬしらがすったもんだしているうちに、形成しなおしたんじゃないよ」

「随分と便利なんだね。これも妖術みたいなものなの？」

「あはは。確かに小春さんが使えば、妖術ってことになるんですか

ねー？」

どうやら少女は、小春のことは詳しく知っているようだった。

「ところで」

ふいに少女が、何かを思い出したというような表情でこちらを見る。

「このお兄さんは、どちら様ですか？」

とりあえず私とお兄さんで自己紹介しませんか。

そんな少女の要望により、居間で自己紹介がはじまった。

確かに、素性も名前が分からないままでは互いに困ってしまう。

「まあ、わしは今更名乗ることもあるまいて。沙希は粗方知っておるじやろうし、秋人にはあとで別に話をするでな」

小春を省略することになり、年長者ということでもまず秋人から話さなければならぬ。

少女へ顔を向ける。自己紹介……自己紹介か……。

「名前は如月秋人。大学生で工学部に所属。年齢は、十八歳。ここには色々あってアルバイトに来ました。趣味は……最近だとアナログゲームですかね」

「……固いのう」

小春のじとつとした視線が痛い。

正直なところ、自己紹介とかアピールとかは苦手なのだ。

「あはは、お兄さんて変わってますね。そういえば何か修練でもされてらっしゃるんですか？ ムキムキじゃないのにとても強くて、さつきはびっくりしましたです」

少女が笑う。正直、どこに笑うポイントがあったのか分からない。それにしてもムキムキとはなんともアレな表現だ。

まあでも、確かにそう思われるのも仕方が無いのかもしれない。

自分の体格を思い浮かべてみた。

身長約170cmの中肉中背、いたって普通の体型である。間違

いなく、ムキムキではない。

ちなみに、顔も普通だと思っている 当者比だが。

一部の知人の客観的評価によると、良い人には見えるらしい。そして華やかさが欠片もないとも。

余計なお世話である。

「幼い頃、祖父に古武術みたいなものを教わっててね。さつきは本当にごめん」

「いえいいんですよ、あれはそもそも私が悪かったんですし」

「そうじゃぞ。沙希は落ち着きが足りんのじゃ」

「……確か、そもそもは小春が原因じゃなかったか？」

「あはは。えーと、お兄さんはこの家の人なんですよね？」

「まあ、そんなところかな。今は叔父達が住んでるけど、昔はここに住んでいたんだ」

なるほど、と少女が何かを考えるように頷く。

ところで、さつきの発言に一つ気になる点があるわけだが……。

「その、お兄さんと呼び方は、他に変えられないかな？」

実のところちよつとこそばゆい。

それに、これでは名前を教えた意味がない気がする。

「実は私には兄がいたのですが、私が物心つくまえに亡くなっ
てしまつて……。お兄ちゃんて、いつかそう呼んでみたかったんで
す」

どうも地雷だったらしい。失敗した。

慌てて言葉を探す。

「ごめん、変なこと聞いた」

「……って話だったら面白いと思いませんか？」
どつと疲れた。

「……もう好きに呼んでいいよ」

「本当ですか！ やったです！」

「良かったのう、沙希」

反論する氣力を失い、なし崩し的に認めてしまった。

まあ、喜んでくれるなら諦めるとしようか……。

「では、次は私の番ですね」

少女はコホンと咳払いをして姿勢を正した。

「私は神流沙希^{かなさき}って言います。お姉ちゃんと被るので、沙希って呼んでください。今回は小春さんに頼まれて、お姉ちゃんの代理として手伝いにやってきましたです」

どうやら彼女　神流沙希も小春から依頼を受けていたらしい、代理のようだ。

「ちなみに職業は今年から高校生にジョブチェンジしましたです。今は夏休み中ですけど。趣味は、読書……ですかね、あはは」
「なんだか少し困ったような笑いを浮かべている沙希。」

高校生……？

秋人は、お茶を啜りながら改めてそつとさり気なく沙希をじっくり眺めた。

少し長く伸ばされたおさげ髪と、くりつとした目が笑顔に映える。ふわふわしているという表現が似合うその雰囲気は、なんだか見ているとおつとりとしてくる

かわいいのは間違いないのだが、問題があるとすればそれは、どう見ても高校生には見えないことである。

中学生　いや、頑張れば小学生でも通じるのではないだろうか。着ている巫女装束が妙に板についていて、和服姿の小春と合わせるとなんだか現実離れた空間になっていた。

「ちなみに、お兄さんとは遠縁に当たるらしいですよ」

「そうだったんだ。もしかしたら、前に会ったことがあるのかもしれないね」

確かに大きな親戚付き合いは数度あったが、残念ながら秋人には全く覚えがなかった。

そういった集まりが苦手だったのも、原因の一つかもしれない。

……一瞬、沙希が少し悲しそうな顔をしたように見えたが、多分気のせいだろう。

話を進めるその口調に変化はなかった。

「接続系は存在干渉と空間干渉です。お姉ちゃんほどではないですが、封印式なら任せてくださいです」

今のは果たしてどういう意味だったのか。

恐らく、自分の知らない業界の用語が満載だった気がする。

悩んでいると、怪訝そうな顔をしているのが気づかれたらしく沙希が首を傾げる。

「どうかしましたか。あ、お姉ちゃんじゃないから封印式に不安なんですね……。すみません、お姉ちゃんは別件でどうしてもこれなかったの……」

「それは知っておるよ。あっちのほうが大問題じゃからの。人数を割くのは当然のことじゃ」

「でもでも、お姉ちゃんほど万能ではありませんが、お仕事はきっちりやりますですよ！　そういえば、お兄さんはどういう接続系なんですか？」

沙希からの突然の振りにどうしていいものか困ってしまう。

そもそも事情が全く分かっていないのだ。

「沙希さん……でいいのかな。悪いんだけど、正直なところさっきから何の話をしているかわからないんだ……」

「沙希、でいいですよー。……ところで、もしかしてまさかまだ誓約^{のり}してないんですか？」

「……その説明をする前に、おぬしが乱入してきたからの」

「あわわわ……私、なんか色々喋っちゃいましたですよ……」

急に慌て始める沙希。対して、平然としている小春。

「わしの変化も見られておるし、もはや今更じやろつ。秋人にも承

諾は得ておるしの」

「……なるほど。それならいいんですが」

秋人は頷いた。

「では秋人よ、少々長くなるので覚悟せい。沙希は退屈かもしれんが、お茶でも飲んで寛いでおれ。装束まで準備していたところを悪いが、今日はもうしない予定じゃ」

「いえいえー、暇ですしせっかくですから私も聞かせてもらいますです。お茶は頂きますけど」

「さてと、どこから話したものかの……」

こうして、小春の長い話が始まった。

4 秘密

この世界は、遙か昔から他の世界の侵攻に晒されていた。
敵対する、こちらとは次元の異なる世界。

通称『アナザーあちら側』。

かの世界より次元を渡りこちらへ現れた異形の者達。

通称『デーモン鬼』。

彼らは動物に、人間に、そして世界に干渉し、害をなし、その生を脅かした。

しかしこの世界とて、それを黙って傍観しているわけではなかった。

地球。テラこの星の上に存在するこの世界を統べるもの。

地球には、この世界を存続させる義務が、そして意思があった。

遍く生物は、地球による庇護を受けた。

意識への直接干渉、認識阻害による自己防衛。

無意識下で鬼を認識させないようにすることにより、逆に相手からの干渉をもほぼ退ける鉄壁を張り巡らせたのだ。

多くの生きとし生けるものは、完全ではないものの再び生を謳歌し始めた。

だがこれは”認識しない”という積極的な対応が可能であるからこそ行える防御であり、万能ではなかった。

彼らは次に無機的なもの、即ち自然に対して干渉しはじめた。

その結果、洪水、噴火、竜巻、地震　多くの自然災害が引き起こされた。

災害にあったものは祈った。天に、神に、そして地球だいちに。

地球は決心し、感受性が高く適性のあったものに接触し、その意思を告げ庇護を解いた。

どうか、ともにこの世界を守ってほしいと。

庇護を解かれるということは、鬼を認識すること。

鬼を認識できるということは、即ち鬼に干渉し排除できるということ。

こうして、この世界の命あるものの長い戦いが始まった。

……小春の時代がかった話をものすごく要約すると、こんな感じだった。

正直、長すぎて二度は聞きたくないレベルである。

ただまあ、裏の歴史についてある程度のことは把握できた。

要するに世界では、人知れず侵略者との戦いが繰り広げられているらしい。

更にその戦いには、意思を持つ地球が参戦しているようだ。

……にわかには信じがたい話ではあるが、小春が嘘をついているとも思えなかったので恐らく真実なのだろう。

「認識していない」ということを知った時点で、星の庇護はずっと弱まってしまうのじゃ」

小春が後戻りできないと言ったのは、それが理由だった。

同時にこの事実が世に知れ渡らないのも、「認識していない」ことが原因だった。

いわば、地球による大規模情報隠蔽工作である。

「質問なんだけど」

一つ、疑問があった。

「庇護なんて手段を取らなければならないほど、その鬼っていうのは太刀打ちできない存在なの？」

人間とて、ただ駆逐されるだけの存在ではないはずだ。

しかし、結果として人は世界から守られている。

仮に当時は技術が未熟だったためだったとしても、現代でも変わらないのはどういうことなのか。

生き残るために殲滅することが目的ならば、数を揃えるほうが有効であり、且つ被害も少ない。

例えば今からでも全人類の庇護を解き、総力をもって抵抗したほうが効果的なはずである。

もっとも情報の錯綜による混乱は避けられないだろうし、世の根底が崩れ去る可能性はあるが。

「いくつかの問題がありますが、大きな理由は次の二点だと言われてますです」

退屈だったのか、沙希が横から口を挟んで答えた。

「まず一つ。多くの人がそのことを知ってしまうこと自体に問題があるですよ」

「鬼による干渉を放置すれば、やがて世界は崩壊するといわれている。じゃが、そもそも鬼という存在そのものがこの世界への干渉になつとるんじゃないよ」

なるほど、ままならない。

存在そのものが世界にとって害であれば、その存在を認識・観測すること事態が危険を招く可能性を孕んでしまう。

少数ならそれも許容範囲のようだが、恐らく全人類となつては保障できかねるのだろう。

「なんとなく理解したよ。それで二点目は？」

沙希に問いかけてみる。

「鬼には、この世界には存在しなかった技術 例えるなら、御伽噺の魔法のようなものが使えるですよ」

「奴らは、因果律に干渉しこの世界の摂理を捻じ曲げることができるのじゃ。わしらはこの技術を、”干渉術”と呼んでおる」

「具体的に言くと、例えば飛んできた銃弾を不可視の壁で弾いたり、何も無いところに炎を出したりしますです」

世界の裏側は、思っていたよりもファンタジーだったらしい。

しかし、真面目に考えてみれば相当厄介なことだ。

「当初の戦いは、それは悲惨なものだったみたいです。コミカルに言つとぼっこぼこだったとか」

確かにそうだろう。

一方だけが圧倒的な兵器を持っている状態で、まともな戦いになるわけがない。

「そこで地球と人は考えたのじゃ。毒を制すには、毒をもつしかないのではなからうかと」

「詳細は謎なのですが、恐らく紆余曲折を経て、私たちは地球というバイパスを通すことにより干渉術を行使することを可能にしましたです。ただしそれは、適性のある人に限られてたわけですが」

「地球と心を通わせ、庇護から脱することを誓約いのちと言い、これを行った者を守り手と慣用的に呼んでおるのじゃが……実のところ守り手の数はあまり多くないのが現状じゃ」

なんとなく話が見えてきた。

「つまり、小春は僕に守り手になることを要求してるわけだね」

小春が申し訳なさそうな苦笑を浮かべる。

「忌憚なく言えばそのとおりじゃ。……最も、今となつてはあまり選択肢はないんじゃないかの」

さっきの話からすれば、既に庇護は解けかかっている状態なのだ。よく分かっていないが、察するに色々と危険なのだろう。

「そもそも、もしかしたら適性がないかもしれないよ？」

「いや、恐らくそれはあるまい。理由は不明じゃが、適性は多くの場合にその遺伝性を発揮しておる。如月家であるおぬしなら大丈夫じゃろう」

「やつぱり、うちはもともと”そういう家系”だったんだね」

「秋人よ。家族に、特に善次郎達に悪気はないのだ。あやつらはおぬしに」

「大丈夫」

そう、なんとなくわかっているのだ。

おかげで、今まで概ね普通の生活を送ることが出来たのだから。

「話を進めよう。守り手になるにはどうすればいいんだっけ？」

努めて軽そうに。そしてお茶を一口。

何も悩むことはないのだ。

祖父母の願いならば、それは叶えざるを得ないのだから。

「まずは誓約ですね。ほとんどを”認識”した今なら、あまり難しく考えることはないですよ」

さも簡単そうに沙希が言ってくる。

「気を落ち着けて、世界を感じて、心で語りかけて、祈るだけでいいです。世界平和のため、そんな感じですかねー」

「沙希の言うとおりじゃ。まあやってみればわかるじゃろうて」
小春も気楽そうである。

落ち着かないが、言われたとおりやってみるしかない。

「わかった。やってみるよ」

秋人は、大きく息を吸って吐いた。

目を閉じ、心を落ち着ける。

浮かぶ心象風景は、空。蒼く澄み渡る、大空。

『なあ秋人よ。この見渡す限りの青空に比べれば、わしらなんて本当にちっぽけなもんじゃないか』

いつだったか、あるいはいつもだったかもしれないが、そうやって祖父は秋人を諭し、慰めていた。

世界にとって、自分一人などというものは大した影響がないのだという自覚。

そしてだからこそ、そのうえで自身が何を為せるかが大事なのだという信念。

秋人にとって世界の象徴とは、果てのない蒼穹であった。

秋人は世界へと問いかける。

自分に何かできることはあるのか。それは、誰かのためになるのか。

すると突如、風景に白い光が満ち、どこからか感情が伝わってきた。

それはまるで雑音ノイズのように感じられた。

純然たる言葉としては表現されておらず、しかしそれぞれに意図がある。

あえて一つの意味として表すのであれば、”世界を守ってほしい”、そういった感じであつた。

圧倒的な存在感を自分の内側から感じるという不思議な感覚。秋人が初めて触れた”世界”だった。

その状態が数秒続いた。あるいは一瞬だったのかもしれない。体感のため不明な時間が経過した後、心に広がった光は突如として弾けた。

それと同時に、パリンというガラスの割れるような音が周囲に鳴り響く。

恐る恐る目を開ける。目の前には小春と沙希、二人が座っていた。さつきと部屋の景色は何も変わっていない。

にもかかわらず、何かが違うように感じられる。

空気が、肌寒い。

「お疲れ様です。どうでしたか？」

「……うん。何か白い光がどぼつときて、何かすごいものに出会つて、何かガラスみたいなものが割れた気がした」

「なんともない方じゃが、まああながち間違いでもないかの。とりあえずは成功じゃ、ご苦労じゃった」

ほっとした様子の二人。

「ただ、なにかこう、寒くないけど寒い感じがするんだ」

普段とは違う状態について秋人は問いかけた。

何かまずい予兆なのではないか、そんな思いがあつたのだ。

「それはきつと世界の庇護が解けたからです。おめでとうお兄さん、これでお兄さんも立派な守り手の一員になりましたです」

「感覚についてはそのうち慣れるじやろうから、今はあまり気にしなくて良いぞ」

どうやらそういうものらしい。

あまり実感は湧いていなかったが 残暑が消えつつある実りの季節の初旬、こうして秋人は守り手となった。

4 秘密（後書き）

気がつくと改稿している。
そしてプロットが変わる。

難しい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1518v/>

その二人、危険につき

2011年10月28日20時14分発行